

深い貴官が行った方がいい」とのこと、その後、中隊に復帰した。

## 支那事変武漢攻略と浜松の艦砲射撃

岐阜県 岩 田 義 雄

私は大正七年一月七日生れ、昭和十二年に陸軍に志願をして、十三年一月十日富山の歩兵三十五連隊に入隊、三か月で一期の検閲、四月富山出発。本隊は徐州会戦中、留守隊の蘇州で教育。その後武漢攻略のため、揚子江の九江に敵前上陸し、攻略戦に初年兵で参加後、十五年八月十五日に除隊。十九年七月十二日、岐阜の中部四部隊に再召集し、浜松付近で、米軍の艦砲射撃を受けながら、本土防衛の第一線で勤務をして復員。

武漢攻略戦は第九師団（金沢）の富山の第三十五連隊の一初年兵として参加したのですけど、十三年八月四日、蘇州から列車で鎮江、そこから船で溯航（駆逐艦護衛）して、十八日に九江へ敵前上陸した。さらに瑞昌に前進

するのだが、食糧足りず、里芋ばかり食べて、下痢・大腸炎・赤痢・マラリヤなどで行軍に苦労した。

私は軽機関銃分隊だが、分隊長と射手がマラリヤで高熱、そのため機関銃と弾匣（弾薬箱）、病人の荷物を持って、初年兵の酷さを本当に味わった。

荷物を水牛にのせたところ、水の中に入ってしまい荷物が駄目。歩きながら野菜捜し、また雨や汗のためにマツチを濡らさないようにどんなに苦労したことか。濡らしたら、早く火を炊いているところへ行って火種をもらおう、そんなことでうちの分隊の炊事が一番遅い。戦闘も大変だが、行軍や裏方の方がもっと辛いことも多いのです。特に初年兵の時は、その厳寄せがほとんどくるわけです。

九月十二日午前四時 瑞昌出発。

十月四日 午後十時 東山を占領。

十月五日の晩、月の明るい夜、月が山に入るのを待つて東山を降りて、川を渡って箕心塙の一角にたどり着いたのです。

夜明けと同時に敵が三方から攻めてきて、何人かが戦死したり負傷をした。午後は迫撃砲を連続して発射して

くる。一寸、一寸前進、夕方やっと頂上に到着。夜八時過ぎ、敵は迫撃砲の援護射撃で葡萄前進で頂上に登ってくる。敵の夜襲で、敵味方大乱戦となる。私は軽機関銃の腰だめ射ちで応戦したのです。ところが薬莖膠着で動かなくなる。素杖（さくじょう）を銃口から突っ込んでまた射ったのです。

一夜で隣の第七中隊はほとんど全滅。わが第八中隊も十二人戦死、負傷者一〇人余。夜が明けて折り重なる戦死者の中から戦友を捜しました。負傷者は竹竿に体を束ねて山を降ろしたのです。この戦闘まで、蘇州を出発した当時の兵員は半数になってしまった。

十月二十五日十六時四十分、漢口陥落。

十月二十六日三時十五分、我が隊の右側で行動していた台湾軍の戦車隊によって武昌が陥落しました。

十月二十七日十七時奥漢線の賀鎮を占領。汽笛を鳴らして奥漢線で逃亡する敵退却路を中断した。連隊長の「駄足」の号令のまま生きてる者は走れ走れで、二十時間も走り続けた。一本の軍公路を逃げる敵と味方が、ゴチャゴチャになって走った。

賀橋に着いたら明日にでも埋設されるだろう地雷が積んでありました。敵がウロウロしている中で一夜の仮眠をしていたが雨になってしまい、畑の畦間の露宮は十月末ともなれば辛く寒かったのです。

十月三十一日 八時 咸寧に向かって出発。

十一月 七日十一時 新居鎮に入城。

十二月 二日 羊楼司出発。

昭和十四年元旦を中支の真中、白霓橋で迎える。

一月 七日 四日間の討伐に出発。

二月 十七日 八角泉に分屯する。第四小隊四

三人、五個分隊

二月 十八日 午後敵襲を受け応戦。

二月二十八日十六時

敵襲を受けて出勤して撃退。

昭和十四年四月二十八日から、五月八日までの日記

四月二十八日（晴）

遊撃隊約二千、李泉方面に出たので朝から大討伐。砲

声、銃声しきり、家鎮頂上を占領待機。

四月二十九日（曇・雨）

天長節の遙拝式を行い、遙か皇室の弥栄を祈る。横山付近に大遊撃隊出る、非常警戒、巻脚絆で寝る。

四月三十日

午前六時起床、敵襲、直ちに配備につき応戦。霧深く、十メートルしか見えぬ。それを利用して雨霞と猛射、手榴弾を投げる地点まで接近してきた。霧が晴れたら迫撃砲の集中で、兵舎はほとんど穴だらけ。

負傷者続出、小隊長（陸軍少尉宮崎立）負傷、十一時戦死された。

敵は一日中、山上から猛射、食事もできず。夕方まで撃砲の集中、夜襲、夜襲絶え間なく繰返し、とうとう一睡もせず。

五月一日（晴）

今日も朝から襲撃々々で弾薬も僅少となり応援隊も来ず。またまた迫撃砲に見舞われ、依然敵は退却せず。午後少し射撃が止んだので、休もうとするが、眠れない。腹はペコペコ、食物もなく乾パンを噛んで我慢。晩までも夜襲、夜襲で銃声絶えず。一部の応援隊が来て勇気百倍、弾薬の補給も少しあった。

五月二日

午前四時、突撃ラッパを合図に襲撃してきた。月明かりをすかし見ると前方二十メートルまで接近して手榴弾を投げる、投げる。こちらはそれを拾って投げ返す。味方の弾薬も少なく、最後の銃剣を信頼して抵抗。夜明けころには鉄条網の中まで入って来た。既に三日間不眠不休、食わずで、死を覚悟した。頑張り頑張り励まし合って全く悲壮な奮戦だった。

午後になって、敵は多数の死体を残して山上まで退却した。午後四時半、日本軍飛行機の援護爆撃があり安心。全く命のあったのが不思議で目はくぼみ、体が骨なしのように疲れた。

夕方になっても応援部隊は到着せず、もう一晚頑張りとの命令で、寝ずの番で交戦。敵は朝から突撃ラッパを吹いて気声を上げては接近してくる。手榴弾を一斉に投げってくる。

敵は一〇メートルまで来るので射ちまくり、一人殺してニコリ笑う。隣の兵舎は手榴弾でほとんど壊され、焼かれてしまった。

まったく口惜しい。兵舎の屋根は穴だらけでいる所がない。晩は山上よりの射撃のみだった。

五月三日(晴)

夜が明けたら何とかなるだろうと思って夜明けを待った。朝になって山砲の射撃がビュンビュン飛んできた。敵も退却し始め、応援隊も到着して一安心。戦場掃除に接近した後に驚いた。

五月四日(晴)

起床、起床といってもなかなか起きない。

脚がだるくてだるくて、午後使役、鉄条網の増設など。戦場掃除の結果、敵の遺棄死体一六〇、手榴弾一八五、小銃弾七二〇〇、小銃一〇、円匙等々其の他多数。

五月五日(晴)

衛兵上番。変な情報も入っており、この間砲撃もあるので、思わず緊張する。

五月六日(晴)

衛兵下番。午前休み、午後使役。部落の東側に鉄条網を張ったり、掩蓋を作ったり、また中隊本部への連絡を兼ねて使役に行ってくる。

五月七日(晴)

いよいよ移動命令が出て、私物梱包やら整理。中隊より准尉が来て冬物一切を取り替え、新しい靴に新しい巻脚絆、新型の夏衣袴(夏服)、夏襦絆(夏の下着)、テンホウ、テンホウ。

晩、情報が入って非常配備、毎晩巻脚絆を巻いて寝る夜が続く。

五月八日(晴)

今に起床がかかるかと思っていたが異常なく夜があけた。午前中鉄条網張り、迫撃砲の穴だらけで、夜も月光が入って昼のようだが、なかなか修理できず。晩、増加衛兵につく。

……翌日警備交替の部隊に送りをして引き揚げたわけで、交通不便、水も悪い、敵の多い八角泉だが住めば都で、名残り惜しいことでありました。

六月三十日、宇品港上陸、午後十時宇品駅乗車、一路富山へと我れらの歓喜を乗せて走る。

初めに申したように、昭和十九年七月十二日に岐阜の中隊四部隊(旧第六十八連隊)に召集されました。若い

時は現役志願だったが、子供が生まれて七月というので、正直いって現役の時とはちょっと気持が違っていましたよ。

各務原の飛行場で掩体作りで、各分隊はお互いに競争をしていました。十一月に米軍が浜松に上陸する可能性があるがあるというので、飛行場でその防禦陣地作りを精を出していたのです。十二月には遠州灘の大地震があったのです。その被害は防諜上かあまり報道されていないようですが、私は直接体験しました。飛行場の陸地が波打つという物凄いもので、その状況は今でも臉に残っています。

天竜川の堤防は一部崩れ、その修理をしました。鉄橋がずれ、東海道線が通れなくなったので、北の方を回る二川線を使っていたのです。もちろん、浜松市一带は大被害でした。

部隊は敵前上陸に備えるため海岸で陣地構築中です。患者八人をお寺においた。ところが夜飛行機が飛んだ、日本の飛行機なら夜飛ばない。吊屋（信号弾）が消えたら、飛行場目掛けて砲撃が始まった。班長が「艦砲射撃

だ、着弾した所へ逃げろ」と知らせてきた。

防空壕へ避難したりしたが、砲弾は中腹のお寺にまともにも当たった。爆撃よりひどい、何しろ海の彼方から射つのだから。

翌朝見たらお寺の屋根も飛んだ、お墓も飛んでいる。直径五十センチぐらいのところに砲弾が十二発当たっていた。我々が退避していた山の穴の上に不発弾がある。一センチぐらいの穴の中だ。もし破裂していたら我々は全滅だったろうから、支那事変生残りの私も今は生きていなかったわけです。内地で、部隊が艦砲で直撃されたのはそういないだろう。

また、空襲はしょっちゅうだったです。グラマン戦闘機（アメリカ海軍の）が海岸から襲撃してくる。飛行士の顔も見えるくらい低空で掃射してくる。電柱に身をかくす。田圃に伏せる、弾痕が水面にパツパツと、生きた心持もしないですよ。

もうその当時は、銃も四人に一挺、水筒は竹筒、飯盒は柳行李、毛布は擬装網で包んで背負う。陣地構築、壕掘りが仕事だが、円匙（小さなシャベル）十字鋏だけで

は能率が上がらない。地元浜松の召集者は家に帰って、シャベルや、つるはしを持ってくる。靴もない、地下足袋も不足しているので草鞋・草履を作って履かせる。葉がなければカマスをほぐして作るという状態だった。見えない敵、反撃することもできない敵から、攻撃されるだけ、切歯扼腕どうにも仕方のない立場の本土決戦用の内地部隊も、大変だったことも知ってもらいたい。

## 長沙・湘桂作戦

熊本県 高木義輝

私は昭和十七年十二月、現役兵として熊本十三連隊に入隊しました。もともと現役召集から中支派遣軍の要員を覚悟して熊本に入隊したのであります。

要員地には戦地上番ということで引率の将校たちがきて、熊本を二十三日に出発しました。勿論船舶輸送で釜山に上陸し、朝鮮鉄道を北上し満州經由、奉天回りで、山海関を通過し南京の向いの浦口へ着きました。そこで

下車し船に乗り南京市内の兵站宿舎に着きまして、次の連絡を待ちながら正月を迎えました。そのうち、船で漢口まで溯ることになりました。

もともと本隊の広部隊というのは、揚子江を中心に岳州の方には前の六師団が警備しております。揚子江から北の方には旧百六師団、昭和十三年編成の部隊ですが、ここで一応凱旋し、その後を広部隊に改編され警備しておいたわけです。そこで一応漢口に到着しました。

漢口を中心に広部隊の一個師団が警備を受け持ち私たちの独歩九二大隊は応城を経て宋河鎮に大隊本部がありました。そこで私の四中隊は一個中隊だけ最前線の徳安という所で警備しておりました。

そこに一応追求しなければいけないということで、孝感から汽車に乗り、それから一線まで行かなければいけないということ、トラックに乗車しました。小銃もいくつか襲撃してきてもいいように実弾を込め、敵がきても絶対にトラックから降りるな、目的地に着くまで敵が撃つてきても下車するなという状況の中で徳安の中隊本部に到着したわけでありませう。正月の二十五日ごろです。